

寺子屋だより

※題字／森川芳聲

もくじ

- 2 巻頭言 謹賀新年……………山口 秀範
- 3 教育雑感⑭(最終回)……………白濱 裕
- 4 偉人レポート……………西島 知洋
- 6 橋を架ける⑪……………占部 賢志
- 8 アール・イーズ・ウエル……………水崎 之子
- 9 講義……………廣木 寧
- 10 TERA KOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 碑のこころ(15) 編集余録



大楠越しに絵画館を望む

碑のこころ

葬場殿址

新宿区霞ヶ丘町
明治神宮外苑

※詳しい解説は12頁に掲載しています

謹賀新年

代表世話役

山口秀範

日本女性の役に立ちたいという決意溢れる文面です。
日本語を全く忘れていても梅子の精神は委縮しませんでした。賀状の続きです。

「ミレニアム」と大騒ぎしてから早くも四半世紀が過ぎ、令和七年の新春を迎えます。内外の情勢は愈々混沌の度を深めています。新しい年が皆様にとって心躍る日々となるよう祈念いたします。

寺子屋モデルは創立二十年の節目を迎えます。それより十年前に海外から戻り、つまらなさそうな表情で登校する日本の子供たちの姿に深い憂慮を覚えたことを契機に、偉人伝を語る活動を思い立ってから紆余曲折、ここまで辿り着きました。昨年開校した「志明館」の充実発展、第二第三と志明館モデルの伝播などチャレンジを続けて参りますので、引き続きご指導ご支援をお願い申し上げます。

明治十六年の正月

明治四年、数え年六歳で岩倉使節団に随行して渡米留学した津田梅子は、首都ワシントンの女学校を優秀な成績で卒業し、十一年ぶりに帰国して新年を迎えました。滞米中寄宿したアメリカの母と慕うランマン夫人への年賀状、原文は勿論英語です。

「時は矢のように飛び、私は十八になります。忘れないうちに、新年おめでとう。私にとっては初めての経験のお正月です。もう一度、みなさんに会いにアメリカに帰りたいとは思いますが、日本に留まっ

て国のために役に立つ仕事をするという私の決心は変わりません。日本の女性のためにすることは山ほどあります」
渡米前に美子皇后（のちの昭憲皇太后）からいただいた励まし「成業帰朝の上は婦女の模範とも相成り候様心掛け日夜勉勵致すべく候」を胸に抱き続け、

「私は憂鬱になったり落胆したりせず、明るい面を常に見るようにしたい。ものごとを幸せに考えるたちなんです。日本は不愉快な暗い雲にも覆われているけれど、陽もさしているのですから、それを見つめなければ」

それから十七年後、「女子英学塾」（のちの津田塾大学）を開校し初志を貫徹したのです。

明治二十五年の正月

再び渡米し名門プリンマー大学を卒業した梅子が、日本で女学校創立へ一歩踏み出そうとする年の正月、まだ全く無名の樋口一葉は二十を迎えました。前年からつけ始めた日記に次の記述が見えます。

「まつ人惜しむ人喜ぶこぶ人憂ふる人さまくなるべき新玉のとし立返りぬ。天の戸のあくる光にことし明治二十五年といふとしの姿あきらかにみえ初て心さへにあらたまる様なるもをかし」

父と兄の死後、母と妹を養う内職に加えて、世過ぎとして小説を本格的に書き始めた一葉は、多難な中でも心穏やかで暖かい新年を祝うのです。日記に添えられた歌です。

いか計のとかに立し年ならむ霜だにみえぬ朝ほらけかな

それから百年後、五千円札の顔となった二人は随分違う生き方を貫きながらも、お正月を機に心を正すという大切な営みを受け継ぎつつ生きていたことが窺われます。

明治三十八年の正月

明治の女性の新年をもう一人紹介します。時は国家の命運を賭けた日露戦争の只中ですが、この年も宮中で「歌会始」が開かれました。以下、小柳陽太郎先生の講義「日露戦争における天皇と国民」（『日本への回帰』第三十三集）からの引用です。

「この歌が数多くの詠進歌の中から選ばれて歌会始の儀式の中で披露されその作者の名前が読み上げられた時、一同はハッと驚きました。というのは、その作者が「陸軍二等卒大須賀昌二の妻まつ枝」という方だったからです。二等卒といへば軍人の位でも一番低い、その妻の歌が宮中で、天皇のお歌と一緒に披露されたのです」

「新年の山」というお題で詠まれた大須賀まつ枝さんの歌は、

つはものに召し出されし我せこはいづくの山に年
迎ふらむ

そして明治天皇の御製は、

ふじのねにほふ朝日もかすむまで年たつ空のの
どかなるかな

という、戦時下とは思えない「実におほらかな王者の御風格あふれた一首」でした。

小柳先生の講義は続きます。「天皇と国民が和歌の世界ではこんなにも、深い平等観で結ばれてゐる。一つに溶けあつてゐる。他の国々では到底見ることの出来ない君臣の関係、日本の国ならではの味はうこの出来ない世界に、歌会始の席に列なつてゐた人々はどんなにか胸をうたれたことぞせう」。

明治を生きた三人の女性に肖って、ゆく年くる年に思いを馳せるといふ新年ならではの貴重な時間を是非とも持つてください。令和の御代に生きる国民の自覚を囁みしめながら。